

私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	261009	学校法人名	真宗大谷学園		
大学名	大谷大学				
事業名	仏教を基軸とする国際的研究拠点の形成と〈人間学〉の推進				
申請タイプ	タイプB	支援期間	3年	収容定員	2995人
参画組織	文学部・文学研究科・真宗総合研究所・図書館・博物館・東方仏教徒協会				
事業概要	<p>行き過ぎた近代合理化が〈生の意味喪失〉を引き起こしてきた。近現代という時代を反省的に問い返そうとする試みがなされてきたが、環境・人権・生命倫理など根源的問題の克服が急務である。そこで、そのような問題に答え得る仏教の可能性を示す。仏教を中心とする国際的研究拠点を構築し、本学独自の〈人間学〉を推進する。仏教研究の重要性が世界に再認識されるよう戦略的ブランディング事業を展開する。</p>				
事業目的	<p>今から遡ること約百年、マックス・ウェーバーは近代の合理化が〈生の意味喪失〉を引き起こすという重大な問題を提起した。その後、とくに二つの世界大戦を経て以降、近現代という時代を批判的・反省的に問い返そうとする試みは様々な仕方になされてきた。しかし現実には、そうした試みをあざ笑うかのように、現代産業社会において世俗化はますます進行し、グローバル化した市場経済の増殖のなかに投げ出された人類にとって、環境、人権、生命倫理など〈生の意味喪失〉の問題は一層深刻なものとなっている。加えて、市場原理は大学などのアカデミックな領域にもすっかり浸透してしまい、その影響で、社会に対して実質的・具体的な〈貢献〉をなし得ると見なされる応用科学などの実学が偏重され、人文学や理系系の基礎学などは厳しい淘汰の波に洗われている。しかし、〈生の意味喪失〉という根源的な問題に人々が直面し、その克服が急務である状況にあって、人文学とりわけ仏教学のような学問は、その問題に対してまさに直接的に答え得る大きな可能性を有していると言える。</p> <p>ところで、本学は1665年東本願寺の学寮として設立された。1901年には近代の大学として開学され、仏教研究と仏教教育の学問拠点として存続してきた。清沢満之や佐々木月樵、そして鈴木大拙のような世界的な思想家を擁し世界に影響力を持つ単科大学として一定の影響力を持ってきた。これは仏教が僧侶の専有物ではなく、政治的・文化的背景を超えて普遍性を持つことの証明であった。また、約16万冊の仏教研究に関する文献を所蔵する図書館・博物館は、例えば第二次世界大戦時には空爆すべきでないと進言すべく作成されたウォーナー・リストに加えられるほど極めて注目される存在となってきた。21世紀の社会が要請するものは、極めて専門性の高い学術研究成果の提供だけではなく、高度な専門的知見を持ちながらも現代社会の様々な局面でそれに対峙することのできる総合的かつ普遍的な叡智である。他の追随を許さない高度な学問的見識によって蒐集された貴重書を保存する図書館・博物館もまた、新しい仕方で世界に開いていく必要がある。</p> <p>【現状と課題の分析を踏まえた研究テーマ】</p> <p>先に見た〈生の意味喪失〉という根源的な問題に、人文学とりわけ仏教学のような学問が答え得る可能性を持つと考える。したがって、第1に、本学がこれまでに取り組んできた仏教研究の蓄積をもとに、国際的研究基盤を形成する。第2に、アメリカやヨーロッパやアジアとのあいだで共同研究を推進する。第3に、人的交流を促進する。第4に、〈人類の知的遺産〉である仏教を社会に対して本学独自の普遍的〈人間学〉として開いていく。言い換えるなら、仏教の根幹にある〈社会の現実と向き合い、真実を探求し、確固たる生きる拠り所を持って歩む〉という精神に根ざす人文学を、本学独自の〈人間学〉として社会に開く。この研究事業を通して、本学が〈人間学〉の大学であるというブランド・イメージを確立する。</p>				

私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	261009	学校法人名	真宗大谷学園
大学名	大谷大学		
事業名	仏教を基軸とする国際的研究拠点の形成と〈人間学〉の推進		
事業成果	<p>本学の研究ブランディング事業推進の背景には、今日の社会が抱えてきた問題に対して仏教の視点から積極的に応答することがきわめて重要であるとの認識があった。そうした認識をもとに、仏教を中心とする国際的研究拠点を構築するとともに、〈人間学〉と呼んで以前から取り組んできた建学の精神の具現化としての自校教育をひろく社会に開いていくことを目標に、事業を推進してきた。ここではその成果を、①〈研究活動における成果〉と、②〈ブランド・イメージの確立という点からみた成果〉とに分けて報告する。</p> <p>① 研究活動における成果 以下の国際シンポジウム開催・学会発表・講座開講・ワークショップ開催により、大谷大学における最新の仏教研究を発信し、海外の研究者とのネットワークを構築することができた。また、成果出版を行うことにより、学術研究成果の提供を行うことができた。</p> <p>(1) 国際シンポジウム開催 【2018年度】 エトヴェシ・ローランド大学（ハンガリー）において、エトヴェシ・ローランド大学（ELTE）仏教研究センター・東アジア研究所と大谷大学真宗総合研究所共催の国際シンポジウム“Buddhism in Practice”を開催。 【2019年度】 国際シンポジウム「Women and Buddhism: Problems and Prospects」（大谷大学）を開催</p> <p>(2) 学会発表 【2017年度】 ヨーロッパ日本研究協会国際会議（ポルトガル）における研究発表／国際仏教学会学術大会（カナダ）における研究発表／国際真宗学会学術大会（武蔵野大学）におけるパネル発表／少林寺と北朝佛教学術研究会（中国）における研究発表／南都浄土教の国際ワークショップ「Pure Land Buddhism in the Nara Schools」（カナダ）における研究発表／国際シンポジウム「Sufism and Zen in The Modern Western World: Spiritual Marriage of East and West or Western Cultural Hegemony?」（スコットランド）における研究発表 【2018年度】 「日本宗教学会第77回学術大会」（大谷大学）におけるパネル発表※東方仏教徒協会／第16回ヨーロッパ宗教学会年次大会（16th Annual Conference of the European Association for the Study of Religions）（スイス）におけるパネル発表 【2019年度】 「第19回国際真宗学会大会」（台湾）におけるパネル発表／中国佛学院（中国）にて『中国浄土教と親鸞の他力思想』をテーマとした講義の実施</p> <p>(3) 講座開講 2017～2019年度、エトヴェシ・ローランド大学へ集中講義の提供を毎年度行なった。</p> <p>(4) ワークショップ開催 2017～2019年度にかけて、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの協定に基づく「歎異抄の英訳研究ワークショップ」を毎年度2回開催した。</p> <p>(5) 研究発表の公開 ○ 2019年7月に中国の学術誌『仏学研究』にて成果発表を公開した。 ○ 2016年度開催の共同シンポジウム『Buddha's Words and their Interpretations 仏陀の言葉とその解釈』の成果出版の準備を行った。（日本で英文出版）※2020年度出版 ○ 2018年度開催の国際シンポジウム『Buddhism in Practice 仏教の実践』成果出版の準備を行った。※2020年度出版 ○ 2015年開催国際シンポジウム『Cultivating Spirituality』成果出版『Adding Flesh to Bones』の出版準備を行った。※2021年度出版 ○ ベトナムでの『日本仏教概説』の出版に向けた準備を行った。※2020年度出版</p> <p>(6) その他 平成29年度科学研究費助成事業の細目別採択件数「中・印哲学・仏教学部門」において、第4位（私立大学第1位）であった。 これらの活動を通じて多方面で成果を発表し、また海外の研究者を招聘することにより、本学の仏教研究及び人間学を世界に発信することができた。</p> <p>② ブランディングにおける成果 (1) 学内広報・学外広報・オープンキャンパス出展 大谷大学広報 第199号「じんげんasile2018春夏号」への記事掲載、全国保護者会、教育後援会事業、同窓会事業、オープンキャンパスにおけるブース出展等にて本学の仏教研究・人間学の紹介を行った。これらのPRにより、仏教研究を専門とする仏教学科の志願者数が本事業実施前から倍増（211%増）した。</p> <p>(2) 東方仏教徒協会（The Eastern Buddhist Society）の事業移管 2017年度より、大谷大学に全事業移管され、毎年度「The Eastern Buddhist誌」を2冊刊行している。2017年度からの3年間で12ヶ国・61人の研究論文を掲載した。また、2018年度より学術リポジトリでの公開をはじめ、2019年度は3,806件ダウンロードされた。また、海外の電子ジャーナルであるJSTORでは3年間で41,304Views、ATLAでは3年間で12,710hitとなり、仏教研究を世界に発信することができた。</p> <p>以上の通り、事業推進が認められた3年のあいだに当初の計画を概ね実行することができた。</p>		

<p>今後の事業成果の活用・展開</p>	<p>3年間の研究期間を通じて、仏教を中心とする国際的研究拠点の構築に努め、本学独自の〈人間学〉を推進し、上記の研究成果を上げることができた。今後、その成果を生かし、更に仏教思想が現代の諸問題に応えるために重要な視点を提示していることを発信する活動を進める予定である。当初に立てた5年間の計画に変更を加えつつ、研究ブランディング事業の中で取り組んだ活動を継続する。</p> <p>2021年度にブランディング事業の集大成として予定していた国際シンポジウムの開催に向けて、2019年度にワークチームを立ち上げ、2021年の夏に「Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World's Religious Traditions (世界の宗教伝統における覚りと知恵と変容)」というテーマのもとで開催する準備を開始した。3日間の開催予定で、エトヴェシ・ロラード大学の研究者を初めとし、国内外から約20名の研究者を招聘し、本学教員とともに世界の宗教的伝統において「知恵」と「覚り」がいかに捉えられてきたかという問いについて研究発表を行うことによって、人間の長い歴史を通して、近代から優先されてきた実証的な知以外に、どのような知恵が重要視されてきたかを明らかにする。このシンポジウムは、国際的研究拠点としての本学の位置付けを更に強化するとともに、行き過ぎた近代合理化の問題に回答する本学独自の〈人間学〉の展開となると考えられる。</p> <p>ブランディング事業の一つの柱となっていた東方仏教徒協会（EBS）は2021年度に、設立100周年を迎える。それを記念するために、二つの事業を予定している。まず、上記の国際シンポジウムにおいて、「East Asian Pure Land Buddhist Traditions' Encounter with Modern Western Philosophy (東アジアの浄土教の伝統と近代西洋哲学との値遇)」と題するEBS設立100周年記念パネルを開催する予定である。次に2021年11月に開催されるアメリカ宗教学会においてEBS設立100周年記念部会を設けて、協会の歴史と設立目的を振り返る研究発表を行った上で、今後の展望について発表し、参加者と意見交換をする予定である。2018年度に日本宗教学会において行ったパネル発表の更なる国際的展開として構想されている。</p> <p>また、ブランディング事業の中で取り組んだ下記の事業を全て継続する予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①東方仏教徒協会の活動（英文学術雑誌発行および公開セミナー開催） ②『Buddha's Words and their Interpretations』『Buddhism in Practice』の成果出版、『Adding Flesh to Bones』の出版 ③『歎異抄』翻訳研究ワークショップ開催および成果出版 ④エトヴェシ・ロラード大学への日本仏教学講座（集中講義）の提供 ⑤ベトナム語による『日本仏教概説』の刊行 <p>以上のようにブランディング事業の成果を活かしつつ、仏教思想に基づいて現代の問題に向き合う〈人間学〉の推進をし続け、仏教を中心とする国際的研究拠点として、研究活動を継続する予定である。</p>
<p>2020年度以降の成果</p>	<p>2021年度「第1回 Award for Promotion of Buddhist Studies (仏教学振興賞)」受賞 インド政府が2021年度に創設した「第1回 Award for Promotion of Buddhist Studies (仏教学振興賞)」を本学が受賞。 この賞は、世界各国に駐在するインド大使館が仏教学推進に国際的に貢献した外国の学者・個人・団体を推薦し、インド政府が受賞者を決定するものである。 これまでの仏教精神に基づく教育研究機関としての活動が評価され、この度の受賞が決定した。</p>